

2025年3月1日

Value Management Innovation

株式会社ブイ・エム・アイ総研

「活・人・経・営[®]」コラム第109回

＜イノベーションで跳躍＞

我が国の少子高齢化が25年問題として現実化してきましたが、延長上に30年問題、40年問題も抱えています。企業経営は「未来づくり」とも解釈できますので、私達の五感を超えた不確実な経営環境に対し、組織ぐるみの知恵と行動でこの壁を跳躍し、展望を開きたいものです。

幸いにも2/15付日本経済新聞の記事によると、昨年の上場企業の財務状況は、純利益等の業績が過去最高を示しており、体力に余裕のある今こそ跳躍に向けた助走の第一歩を踏み出すチャンスでしょう。そのためには先ず、経営外部環境の動向や自社のポテンシャルを踏まえて、持続的成長を目指した中・長期経営戦略をつくり、それを全社で共有してスタートラインに立ちたいものです。

助走を加速するための稼げる新製品や新サービス開発の焦点は、プロダクト・イノベーションの創出ですが、一方で、日常の改善活動を辛抱強く継続して生じるプロセス・イノベーションは、経営の体質・体力の強化等を見込み、活動を支える新しい発想や行動が自社の強みの強靱化に結び付きます。創造的破壊と連続的改善の複眼思考です。

どちらのイノベーションも経営トップの「革新に向けた強い意志」が前提ですが、開発に向けた素材や技術の新結合だけでなく、社内統治の横断化、仕入先や顧客企業との共創、M&A、企業統合なども含め、組織的な新結合による相乗効果を狙えば、助走がスピードアップされて大きな跳躍が期待出来ます。

＜イノベーションはシステムとしての営みである＞

イノベーションというものは、本来いくつかの要素が組み合わさって機能する。つまり、常にシステムとして機能するのである。～途中略～ ハードウェアについての技術ばかりではない。それを生産するための技術、品質を管理するための技術、販売するための流通網や顧客への売り込みのための工夫、サービスの体制、製品を開発するためのプロジェクトを管理するための手法などきりが無い。受け入れる側にも使用するための商品知識や補完的なシステムが必要になる。実にさまざまな種類の技術、知識、仕組みがあって、それが全体として機能しなければ、イノベーションは結実しない。これはまさにイノベーションが経済発展を目指すものであるがゆえの特性である。

― 出典：「イノベーション・マネジメント入門」

― 一橋大学イノベーション研究センター 編 ―